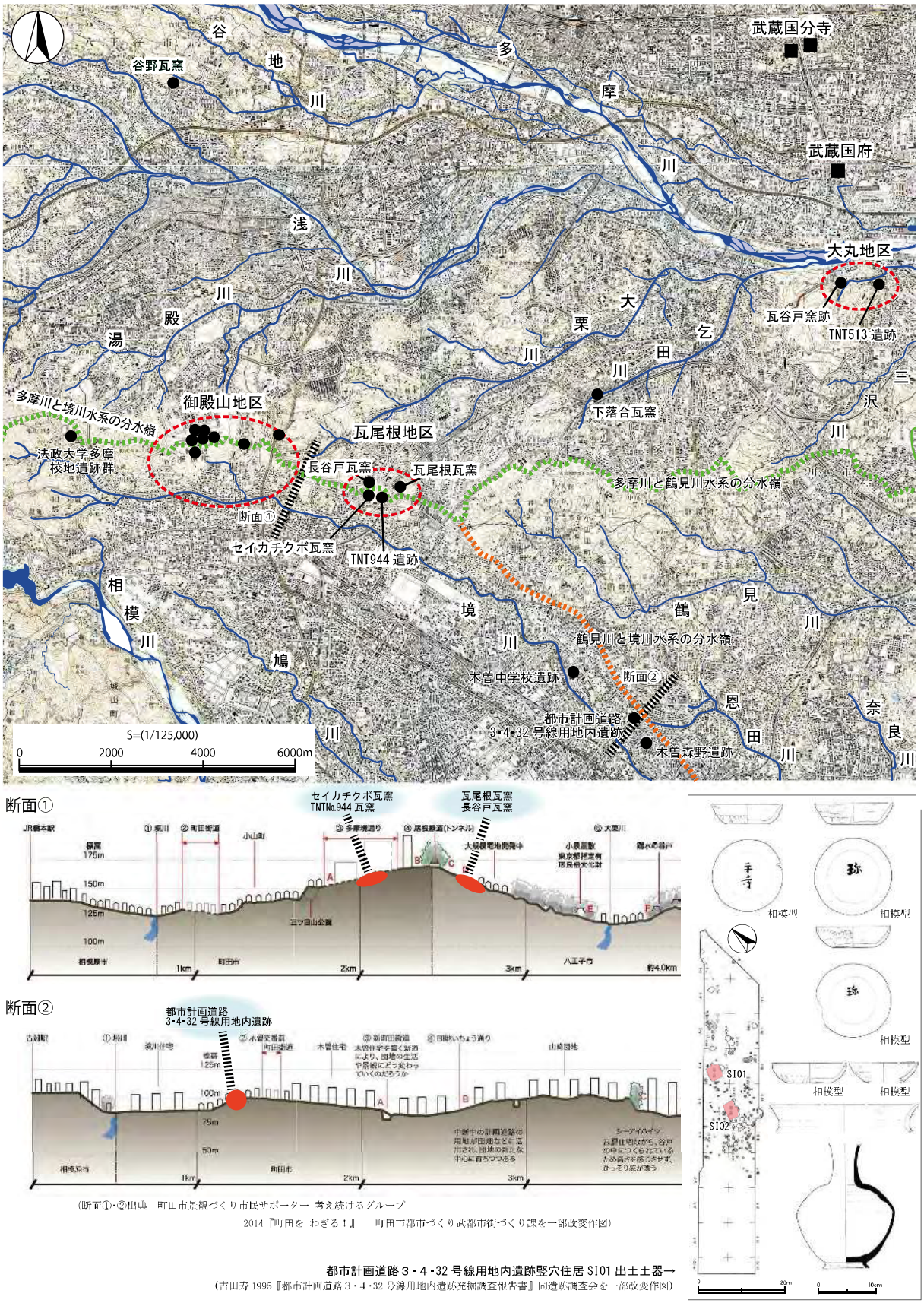


（断面①・②出典　町田市景観づくり市民サポーター　考え続けるグループ
2014『町田を　わぎる！』　町田市都市づくり・武都市街づくり課を一部改変作図）

都市計画道路３・４・32 号線用地内遺跡竪穴住居 SI01 出土土器→
（吉山寿 1995『都市計画道路３・４・32 号線用地内遺跡発掘調査報告書』同遺跡調査会を一部改変作図）

図９　境川上～中流域の遺跡と多摩丘陵の分水嶺

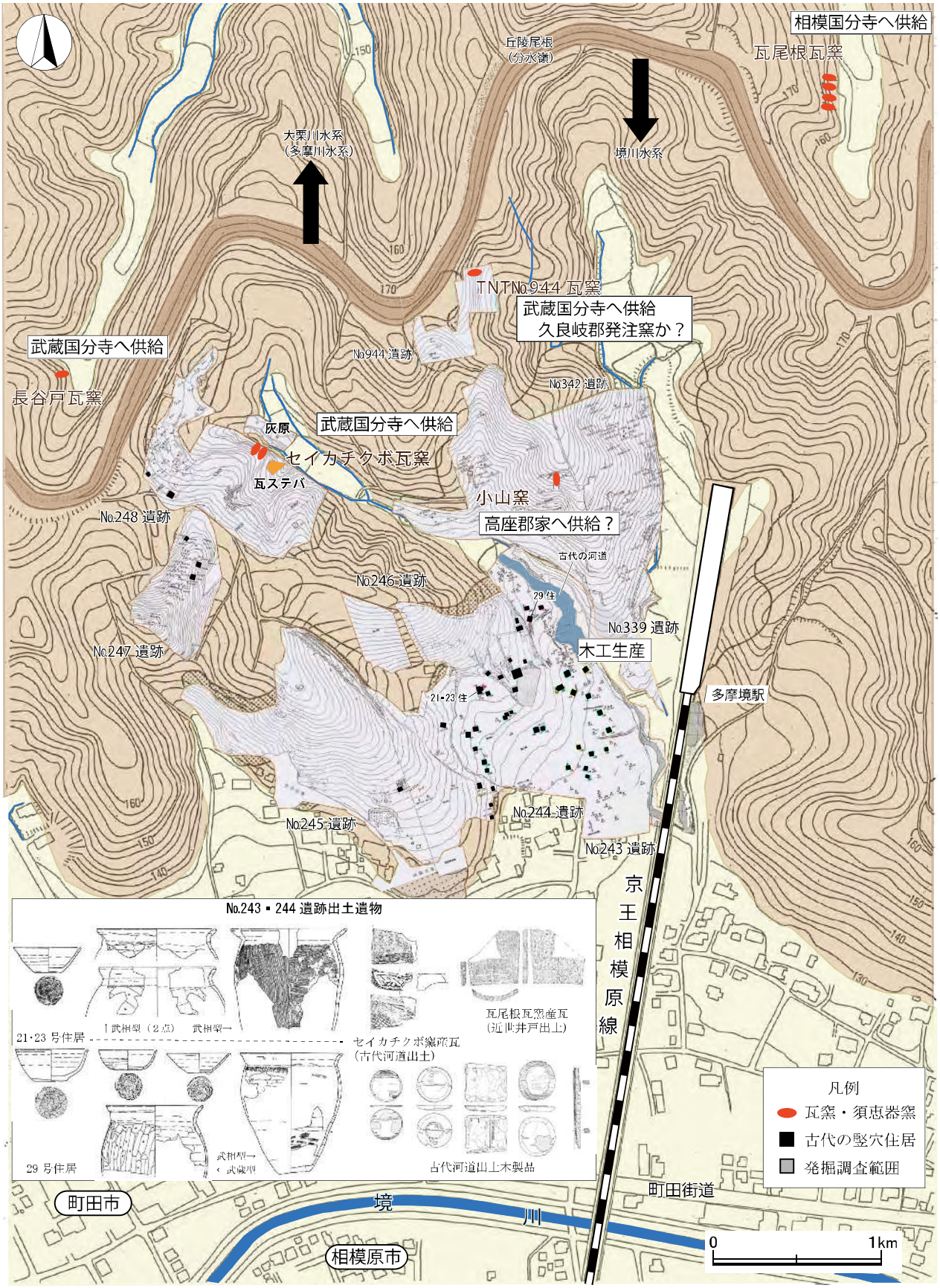
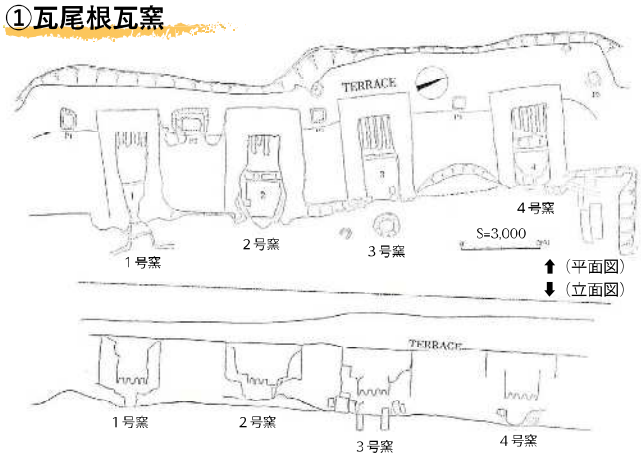
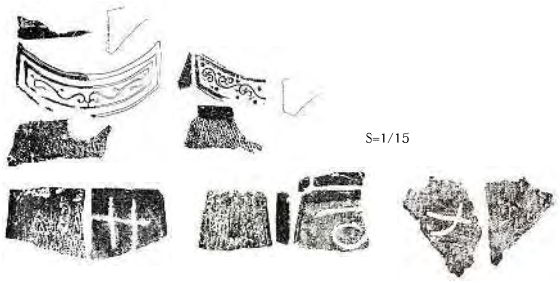


図 10　相模・武蔵両国分寺の生産瓦窯（南多摩窯跡群瓦尾根支群）と周辺の遺跡

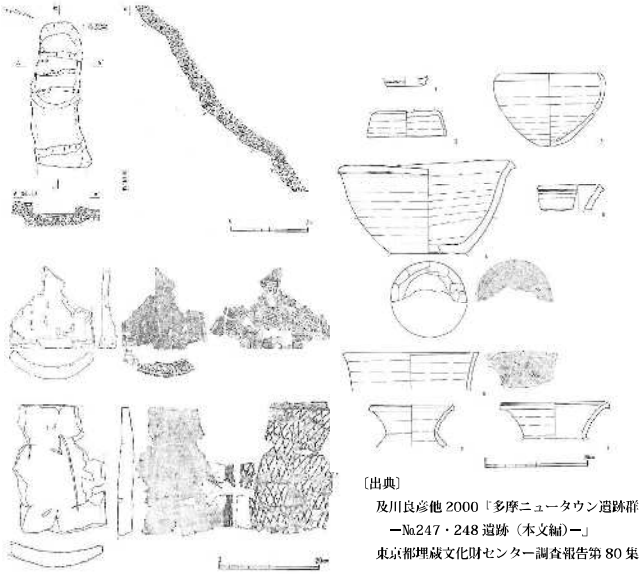
①瓦尾根瓦窯





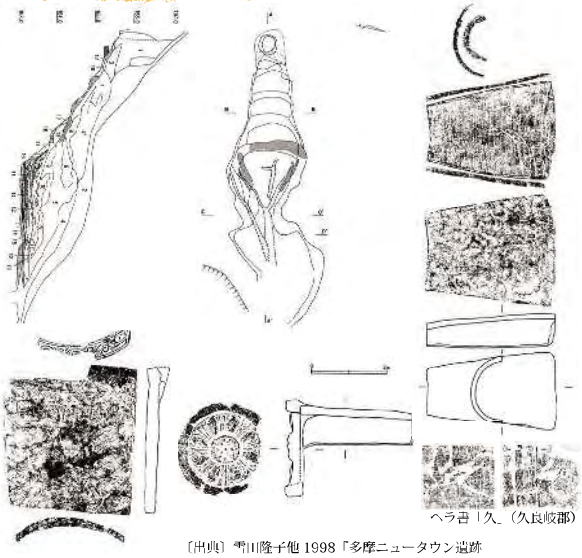
〔出典〕
大川　清 1969「瓦尾根瓦窯跡ー相模国分寺瓦窯跡の調査ー」考古学研究室報告乙種第２冊
国士舘大学文学部考古学研究室
大川　清 1979「多摩丘陵窯跡群調査報告」「東京都埋蔵文化財調査報告」第６集
東京都教育委員会（※軒丸瓦の拓影図のみ）

②セイカチクボ瓦窯（多摩ニュータウン№248 遺跡）



〔出典〕
及川良彦他 2000「多摩ニュータウン遺跡群
ー№247・248 遺跡（本文編）ー」
東京都埋蔵文化財センター調査報告第 80 集

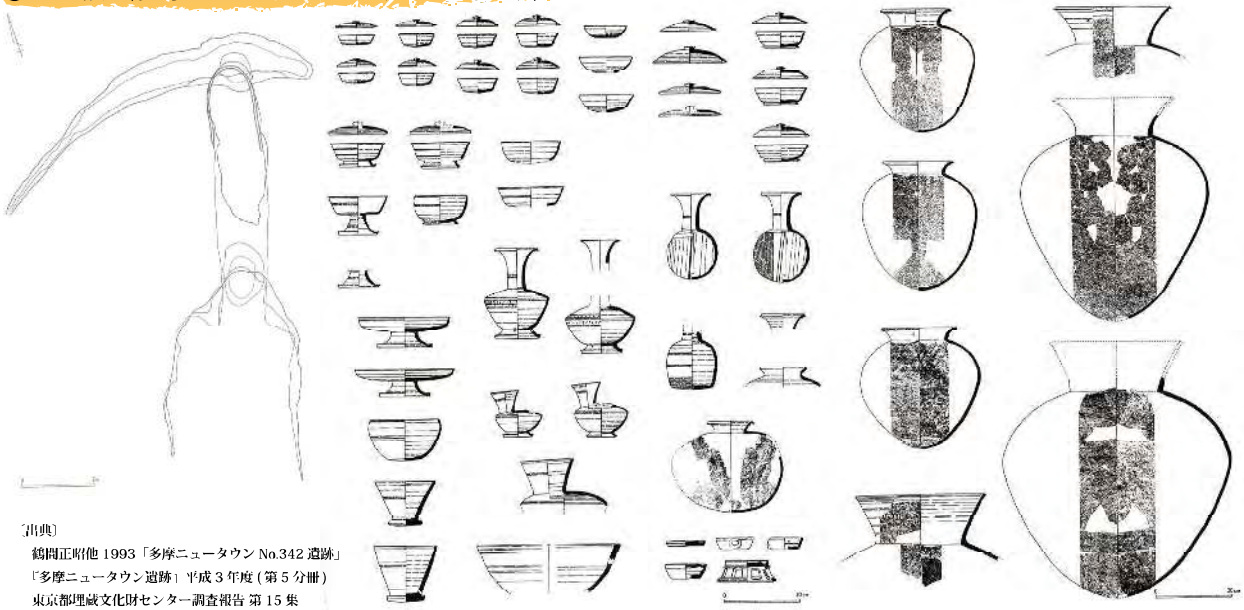
③多摩ニュータウン№944 瓦窯



へラ書「久」（久良岐郡）

〔出典〕雪山隆子他 1998『多摩ニュータウン遺跡
先行調査報告９」東京都埋蔵文化財センター調査報告第 52 集

④小山窯（多摩ニュータウン遺跡№342 遺跡）



〔出典〕
鶴間正昭他 1993「多摩ニュータウン No.342 遺跡」
『多摩ニュータウン遺跡」平成３年度（第５分冊）
東京都埋蔵文化財センター調査報告 第 15 集

図 11　町田市小山地区の窯跡群（瓦尾根支群）

図 12　境川中流域（鶴間・瀬谷周辺）の旧地形と相武国境

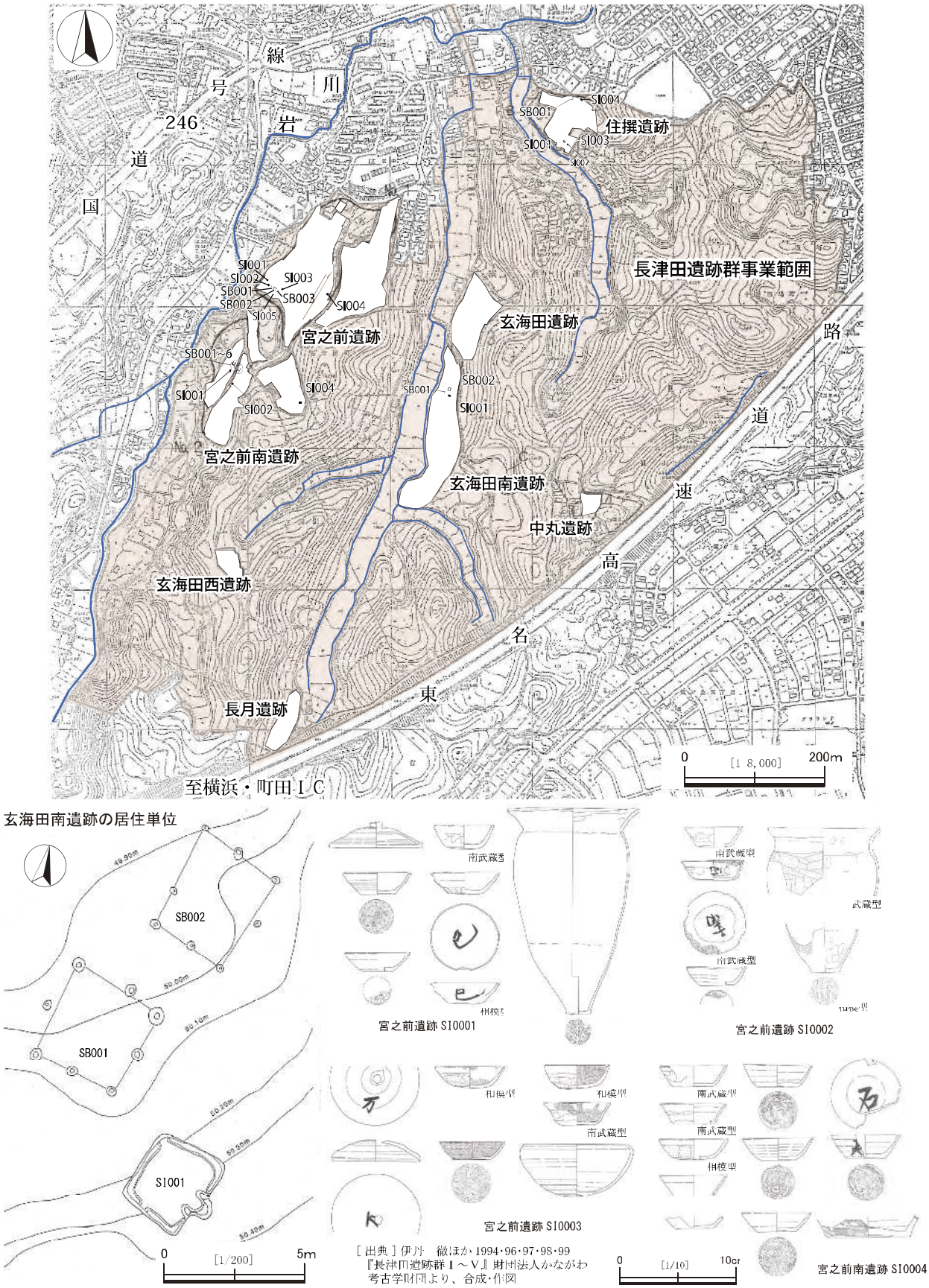


図 13　横浜市緑区長津田遺跡群の古代集落と出土土器の様相

中世の伊豆と相模

―鎌倉時代の武士本拠地の様相から―

伊豆の国市文化財課　池谷　初恵

はじめに

中世において、前半期の鎌倉、戦国時代の小田原、相模国の２都市は、中世東国の首都として栄えた。いっぽう、伊豆国は源頼の挙兵の地であり、鎌倉幕府執権北条氏の本拠地であった。また、小田原北条氏初代の伊勢宗瑞は、伊豆を本拠とし相模へ進出した。相模国に隣接する伊豆国は、中世東国で活躍した武士たちを多く輩出するとともに、首都である鎌倉あるいは小田原への物資の供給地でもあった。相模国と伊豆国は中世を通じて人とモノが往来し、深い関係を積み重ねてきたのである。

本講座では、考古学から見た鎌倉時代における伊豆国の武士本拠地の様相を紹介し、相模国との相違、関連を探っていく。

１．鎌倉御家人本拠地の様相

（１）鎌倉幕府草創期の伊豆・相模の御家人本拠

図１は『吾妻鏡』治承４年（1180）８月の記事から、源頼朝の挙兵時に従った武士、あるいは敵対した主な武士の本拠地を示したものである。８月17日の山木攻めの後、石橋山に向かった頼朝に従った武士は、28氏46人である。このうち、16氏が伊豆国、９氏が相模国に本拠をもつ武士たちで、挙兵時の地理的な要因が大きいが、伊豆国の武士たちが多く従っていた。

伊豆国は海に囲まれた山がちな地形であり、平地は限られているが、北部の田形平野に限定しても数多くの武士たちが集中していたことがわかる。これは逆にいえば、武士たちの所領は狭く、大きな武士団ではなかったことを物語る。つまり、三浦氏や千葉氏のように大きな所領を有していたわけでもなく、また、伊東氏を除けば、一族が分家して広く展開していた例もみられないことが伊豆国の特徴といえる。

（２）北条氏の本拠地の発掘調査成果

これら伊豆の武士たちの本拠地は地名などからの推定は可能であるが、発掘調査によって館や寺院の具体的な様相が明らかになっているのは、現在までのところ北条氏の本拠地に限られている。北条氏の本拠地の館は、伊豆半島北部に位置する伊豆の国市（旧田方郡韮山町）寺家・四日町の御所之内遺跡にある（図２）。御所之内遺跡は狩野川右岸に立地する独立丘「守山」から北側に延びる自然堤防上に立地し、東側には伊豆半島を縦断する下田街道が通り、遅くとも戦国時代には、四日町付近に市が成立していたことが知られている。また、西側の狩野川付近には「河岸」の地名伝承が残っており、近世には川湊として機能していたことが伝えられている。北条氏が館を構えた場所は、下田街道と狩野川水運との交差する流通の拠点であった。

北条氏の本拠地一帯は、守山を囲むように御所之内遺跡をはじめ５つの中世遺跡と３つの史跡があり、関連する中世遺跡群として「守山中世史跡群」と総称されている。最も広い御所之内遺跡では鎌倉～室町時代の遺構・遺物が多数検出され、遺跡内に「史跡北条氏邸跡（円成寺跡）」（註１）と、「史跡伝堀越御所跡」（註２）が含まれる。守山東側の願成就院跡（「史跡願成就院跡」）は、北条氏が氏寺として建立した寺院で、国宝運慶作仏像群などを今に伝えている。光照寺遺跡や満願寺跡でも鎌倉時代～室町時代の遺構が確認されている。北条氏の本拠地では館と関連する居住空間や寺院が集中し、北条氏滅亡後もこの地が地域の中心地として継続して営まれてきた。

（３）屋敷地の構成と変遷

御所之内遺跡の中で広範囲の発掘調査が行われ、北条氏の館が明らかになった史跡北条氏邸跡（御所之内遺跡第22～36次調査）では、12世紀中葉から15世紀末までの遺構が確認され、中世１～４期、８小期に整理されている。鎌倉時代（中世１・２期）の主な建物構成と変遷は以下の通りである（図３）。

中世１ａ期（12世紀中葉～後葉）：掘立柱建物跡４棟、井戸１基、区画溝２基

中世１ｂ期（12世紀末～13世紀前葉）：掘立柱建物跡６棟

中世１ｃ期（12世紀末～13世紀前葉）：掘立柱建物跡８棟、井戸１基、溝３基

中世２ａ期（13世紀中葉～後葉）：掘立柱建物跡１棟、溝状遺構３基、土坑７基

中世２ｂ期（13世紀末～14世紀前葉）：土坑墓４基、溝１基

建物はいずれも総柱の掘立柱建物で、大型建物には塀と思われる柱穴列が付属する。屋敷地が形成されたのは、12世紀中葉で、当初から建物跡と塀跡、区画溝などの配置に規則性がみえる。12世紀末～13世紀前葉の１ｂ・ｃ期（註３）に建物跡が最も多くなり、遺物量も増大する。とくに1ｃ期は逆Ｌ字状にめぐる柱穴列で屋敷地内を区画している。13世紀中葉以降の２ａ期になると建物跡や他の遺構が急激に少なくなり、２ｂ期に至って前代まで建物があった場所に土坑墓がつくられる状況となる。屋敷地としての機能が失われたか、居住空間が他に移動したと考えられる。

（４）出土遺物について

史跡北条氏邸跡の調査では、約7,780㎡の調査面積で総計203,604点の遺物が出土した。出土破片数を時代別にみると、中世の遺物が168,523点で82.7％である。ただし、この数値は14世紀前葉に建立された円成寺跡の出土遺物を含んでいる。

中世の土器・陶磁器組成では、かわらけが151,677点で93.9％を占める（図４）。また、陶磁器の出土量を時期別のグラフに示したものが図６である。貿易陶磁は12世紀後半から13世紀前葉にかけての出土量が最も多く、13世紀中葉から14世紀前葉は減少し、さらに14世紀中葉以降は、急激に出土数が減少している。瀬戸美濃の時期別の出土数では、13世紀～14世紀前半は少なく、14世紀末～15世紀前半にかけて急激に増加する傾向を示す。つまり、貿易陶磁は北条氏の館の時代は多く流入し使われていたが、14世紀の円成寺ではほとんどなくなり、逆に瀬戸美濃が多く入るようになる。これらを合わせた全体的な出土量のグラフをみると（図５）、12世紀末～13前半の北条氏の館のピークと、14世紀後半～15世紀前半の円成寺のピークが明瞭である。遺跡の性格によって使われる陶磁器の差が明瞭にみられることも、この遺跡の特徴である。

（５）相模の武士本拠地

相模国の御家人クラスの武士本拠の遺跡として、波多野氏の東田原中丸遺跡（秦野市）、渋谷荘内の渋谷氏の館とされる上浜田遺跡（海老名市）・宮久保遺跡（綾瀬市）などを挙げることができる。東田原中丸遺跡では、12世紀末～13世紀前半の四面庇付を含む掘立柱建物跡21棟が確認され、上浜田遺跡・宮久保遺跡では、北条氏邸跡と同様に規模の異なる掘立柱建物跡と柱穴列の組み合わせがみられる。

また、現在、新東名高速道路建設に伴う発掘調査が進行している伊勢原市では、子易・中川原遺跡で多数の掘立柱建物跡や寺院跡と池状遺構、石敷き道状遺構などが確認されている。これらは御家人糟屋氏に関わる遺跡と考えられており、今後の調査成果・まとめが期待される。

２．流通から見た武士の姿

（１）鎌倉を支えた物資供給地としての伊豆

『吾妻鏡』文治元年（1185）二月十二日、頼朝が自ら「狩野山」に赴き伽藍建立のための材木を視察した。狩野山は伊豆の天城山で、伽藍とは当時造営を進めていた勝長寿院か鶴岡八幡宮であろう。同年三月十二日条に、平家攻めのための兵糧米を積んだ兵船32艘が伊豆半島南端の鯉名・妻良（南伊豆町）に準備されていたことが記されている。また、承元二年（1208）閏四月二日には、鶴岡八幡宮神宮寺の用材が「狩野山」から沼津に運び出されている。

このように、史料として残る事例は多くはないが、鎌倉幕府を支える物資の供給地として、伊豆は重要な地であった。とくに、河川と海を利用することによって、材木や米などの重量物の運搬に伊豆は最適な地であったであろう。

（２）狩野川沿いの流通倉庫

鎌倉時代の流通を考古学的に証明することはむずかしいが、伊豆国から駿河国にかけての狩野川・境川流域で大型建物跡が多く確認されていることに注目している。図７に示した遺跡は、両河川流域で大型の総柱掘立柱建物跡が検出された遺跡である。このうち、宮ノ前Ｂ遺跡（三島市）、玉川塚田遺跡・戸田遺跡・、桜田遺跡（駿東郡清水町）、下石田原田（沼津市）は、出土遺物から12世紀後半から13世紀前半の建物跡であることが明らかになっている。これらの建物は、桁行４間以上の総柱であること、建物の軸が古代駿東条里と近似する方向を示すなどの点で共通する。また、出土遺物が非常に少ないことから居住空間とは考え難く、河川に近接するという立地条件を考慮すると、水運など河川交通に関わる倉庫群を想定することが可能であろう。

これらの遺跡を河川水運・交通に関わる倉庫群と仮定すると、物資を供給する先として伊豆国府、三島神社、大岡荘、あるいは狩野川を遡った北条氏の本拠地などが考えられるが、文献史料等はなく具体的なことは不明である。遺跡の具体的な様相を知る手がかりはきわめて少ないが、時期の限定される特徴的な遺構として今後の類例の増加に期待したい。

（３）伊東氏の流通拠点

伊東氏は中伊豆の工藤氏から分かれ、現在の伊東市に本拠をおく武士である。一族は伊豆半島東海岸の宇佐美、河津にも展開し、それぞれ宇佐美氏、河津氏を名乗る。伊東（工藤）一族は頼朝挙兵以前から伊豆国で最も大きな武士団であったと思われる。伊東祐親は頼朝挙兵時には敵対し滅亡するが、

一族の中には鎌倉御家人として残った者も多い。伊東氏の館跡については諸説あり、確定には至っていない。また、当該地の発掘調査はなく、考古学的な情報も少ない。

伊東氏に関わる可能性のある遺跡として、12～13世紀の大量の遺物が出土した井戸川遺跡の発掘調査成果が注目される。井戸川遺跡は伊東氏館跡推定地の1つである竹之内地区の崖下、また最近の有力な推定地の仏光寺近くに立地する。調査地点は当時の海岸に近い標高４～５ｍの低地で（図８）、調査面積はわずか115㎡にも関わらず、5605点もの中世遺物が出土した。注目すべきは、貿易陶磁や瀬戸美濃・常滑・山茶碗などの東海地域の陶器、南伊勢系鍋（三重県産）が大量に出土していることである。いっぽうで、武士館で多く出土するかわらけはわずか2.3パーセントにすぎない。これらのことから、この遺跡は海を通じて物資を集積する流通拠点であると考えられている。また、遺跡の立地や時代を考慮すれば、この流通拠点に伊東氏が関わっていた可能性が高いといえるであろう。

３．伊豆の武士たちの宗教世界

（１）北条氏の氏寺　願成就院

願成就院跡は、北条氏の館跡に近接した氏寺である。昭和45年(1970)の最初の発掘調査から20ヶ所以上の発掘調査が行われ、石積みの基壇跡、建物の礎石、雨落ち溝と推定される石列、砂利敷き道などが検出されている（図10)。いずれも調査範囲が狭いため、堂や塔の規模や配置は確定できていないが、大規模な伽藍の寺院であったことを想定できる。また、現在は住宅地となっているが、昭和35年の測量調査により、南北約150ｍに及ぶ池の存在が想定されている。池の存在や背景となる守山との配置などから、願成就院は平泉毛越寺や鎌倉永福寺と同様の臨池伽藍の寺院と考えられる。

東国における中世前期の武士本拠の景観として、「御館＋御堂（浄土庭園付）＋先祖墓＋氏神」の図式（小野 2004）や、「屋敷・寺院（阿弥陀堂)・墓地・観音霊場・聖地」などを配置したモデル（齋藤 2006）などが提唱されている。浄土庭園や瓦を葺いた御堂は権威の象徴でもある。北条氏の本拠においては、先祖墓や氏神が明らかになっていないものの、「御館+御堂」のセットとなる空間が形づくられている。

（２）願成就院の瓦

願成就院跡ではこれまでの発掘調査によって約3000点の瓦が出土している。そのうちの約１割が瓦当文様をもつ軒丸瓦・軒平瓦である。また、史跡北条氏邸跡や御所之内遺跡でも多くの瓦が出土している。これらを分類し、三嶋大社、駿河国天神洞遺跡（沼津市）（註４)、鎌倉の永福寺跡・鶴岡八幡宮出土の瓦と比較したものが図11である。

願成就院の瓦を中心に瓦当文様をみると、鎌倉永福寺・鶴岡八幡宮、天神洞遺跡、三嶋大社などと軒丸瓦では３例、軒平瓦では鎌倉と５例、天神洞遺跡のみと１例の同范・同文関係が認められる。とくに唐草文 A 類は、永福寺 YNⅠ03 類と同范であり、同様のものは埼玉県西浦遺跡で確認されている（石川 1998)。いっぽうで、願成就院跡出土の軒平瓦は折り曲げ技法という京都の造瓦技術の系譜が想定されている。瓦の文様・技術からも、鎌倉幕府あるいは地域内でのネットワークを結ぶ武士たちの本拠地の造寺活動、宗教世界が見えてくる。

（３）二所詣と白いかわらけ

東国の褐色のかわらけに比べて、京都のかわらけは全般に白か乳白色、あるいは灰白色を呈し、「白かわらけ」と呼ばれることもある。白かわらけは、京文化を模倣する東国武士の憧憬のひとつであり、北条氏の一族である金沢貞顕が、京にいる子息に「白土器」を送るよう依頼している手紙が残されている。鎌倉で出土する白かわらけの多くは京都からの搬入品か、京都の技法を模倣したものが知られているが、その多くは手づくね成形でつくられている。

これに対して、伊豆国ではロクロ成形でつくられ、胎土もやや赤みのある独特の白いかわらけが出土する。これを京・鎌倉と区別するために、「白色系かわらけ」と呼んでいるが（池谷 2004）、出土する遺跡は箱根神社・伊豆山神社・三嶋大社・北条氏の館周辺にほぼ限定され、その他は伊東市や鎌倉においてごく少量出土する程度である。上記の三社は源頼朝がはじめた鎌倉幕府の公式行事「二所詣」が行われた神社として知られている。このことから「白色系かわらけ」は二所詣のために特別につくられたかわらけであり、その生産には伊豆を本拠地とする北条氏が深く関わっていたのではないかと考えられる。箱根神社と伊豆山神社は、伊豆と相模の国境に位置し、まさに境界の地にあって鎌倉および東国を鎮護する神社としての意識があったのではないか。そして、その境界の地における神事では、伊豆国を本拠とする北条氏が特別なかわらけを提供することに意味があったと思われる。

註

１．北条氏の館跡の北条氏邸跡と北条氏滅亡後に一族の尼僧が建立した円成寺跡の複合史跡である。

２．15 世紀後半、古河公方に対抗するための公方として、京都から下った足利政知（義政庶兄）の御所跡。

３．１ｂ期・１ｃ期は遺物の時期差はないが、柱穴跡の重複、主軸方向の違いにより小期を分けた。

４．天神洞遺跡は狩野川沿いの大岡荘に近接し、建物等は確認されていないが、大量の瓦が出土した。大岡荘を所領とする牧氏に関係する寺院跡の可能性が考えられる。

主な参考文献　（発掘調査報告書は省略した）

池谷初恵 2004 「東国境界域の白いかわらけ」『中世東国の世界 2　南関東』 高志書院

池谷初恵 2010 『鎌倉幕府草創の地－伊豆韮山の中世遺跡群－』 新泉社

池谷初恵 2020 「伊豆・駿河・遠江」『中世瓦の考古学』 高志書院

伊東市　 2018 『伊東市史通史編　伊東の歴史Ⅰ』

石川安司 1998 「東松山市西浦遺跡出土の中世瓦」『比企丘陵』第３・４号

小野正敏 2004 「中世武士の館、その建物系譜と景観」『中世の系譜』 高志書院

齋藤慎一 2006 『中世武士の城』 吉川弘文館　歴史文化ライブラリー218

松葉　崇 「中世・近世」『大山が紡ぐ歴史遺産～東名から新東名～記録集』（公財）かながわ考古学財団

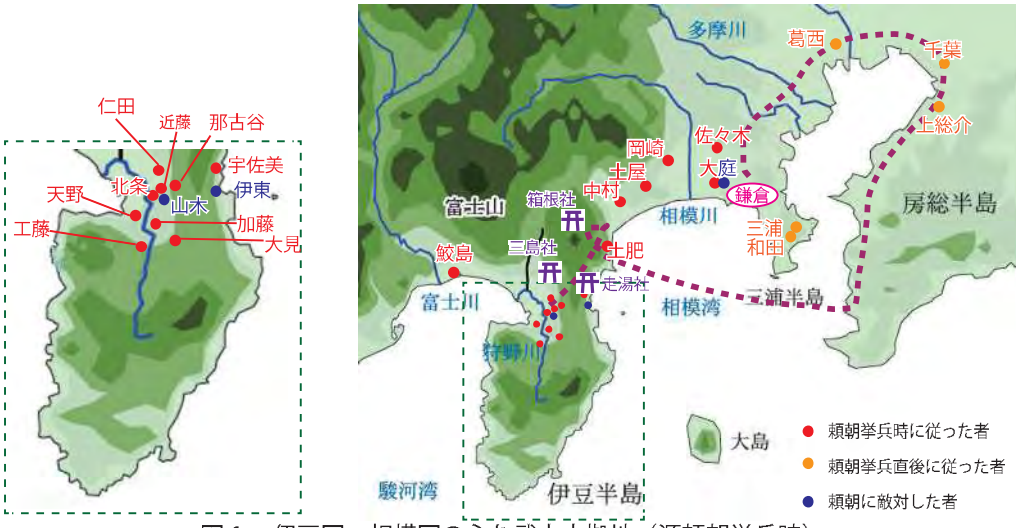


図１　伊豆国・相模国の主な武士本拠地（源頼朝挙兵時）

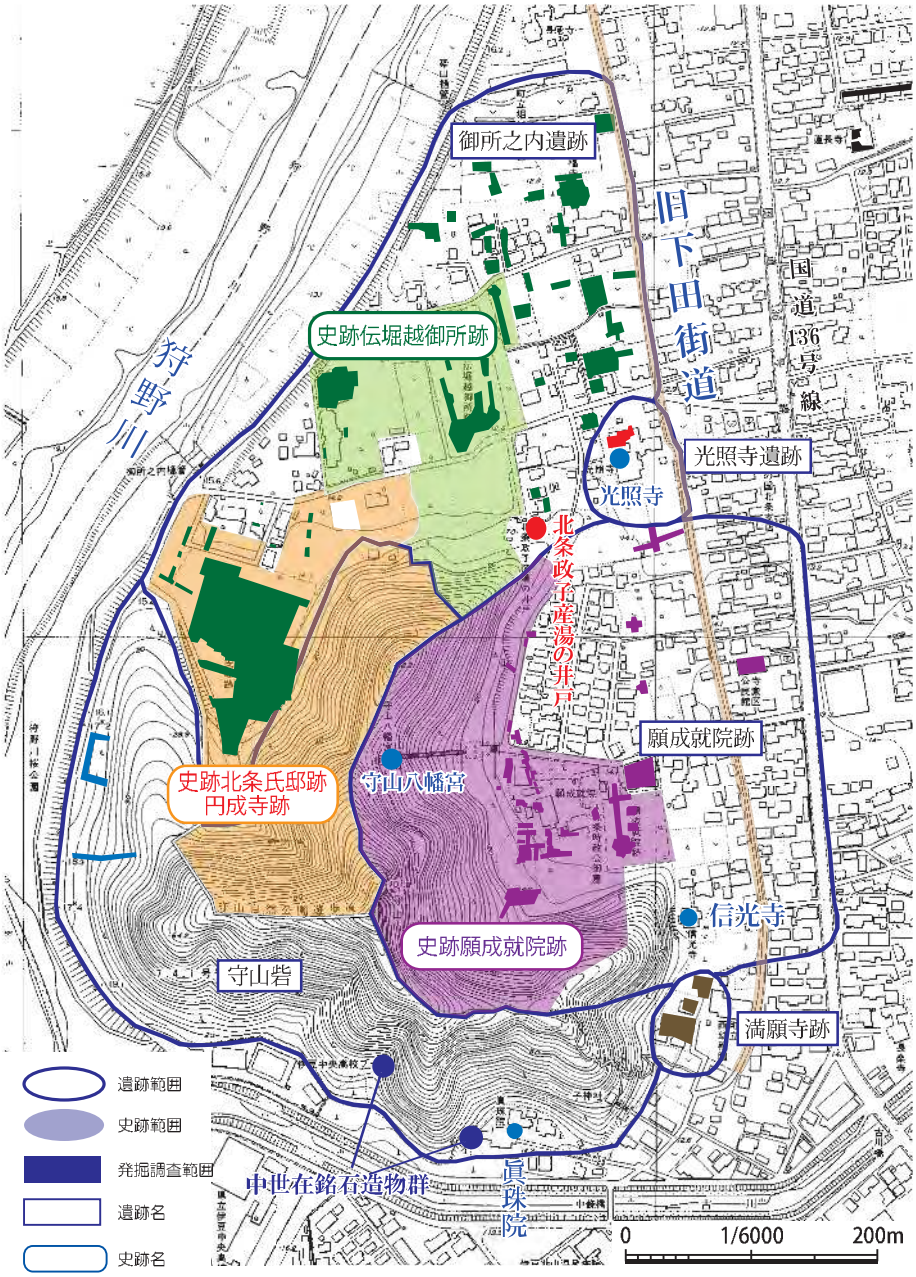
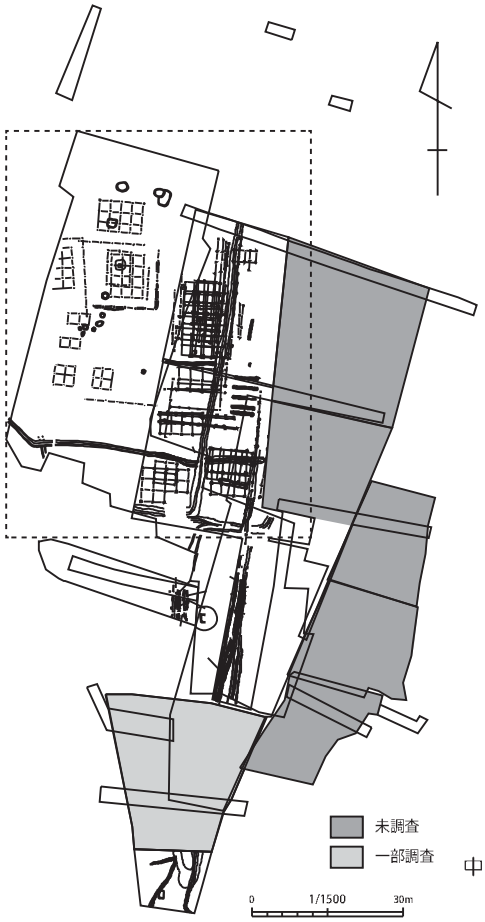
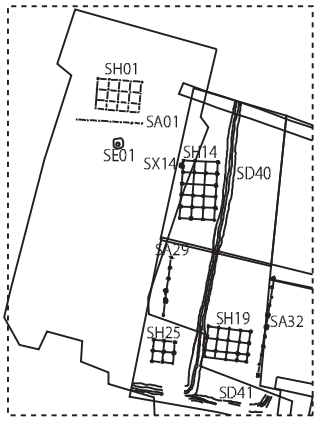


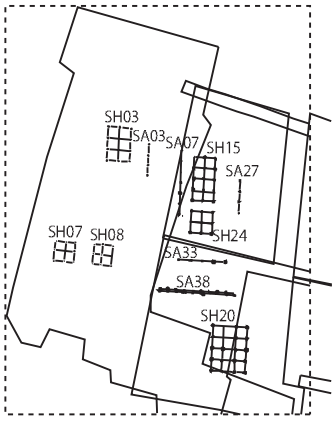
図２　伊豆の北条氏本拠地の遺跡・史跡（守山中世史跡群）



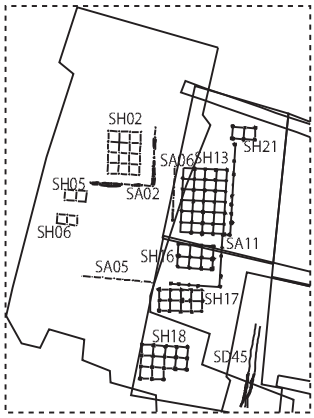
中世１・２期の遺構（鎌倉時代）



中世１ａ期（12 世紀中～後葉）



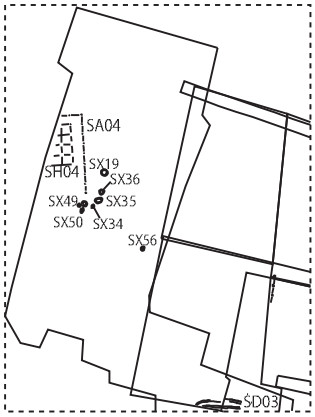
中世１ｂ期（12 世紀末～ 13 世紀前葉）



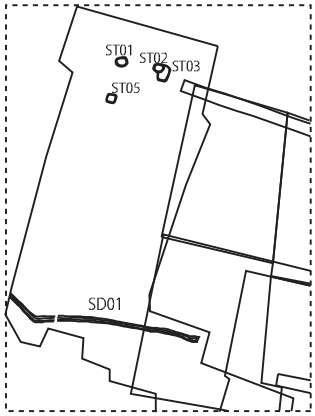
中世１ｃ期（12 世紀末～ 13 世紀前葉）

図３　北条氏邸跡の鎌倉時代の遺構と変遷

写真１　北条氏邸跡　掘立柱建物跡



中世 2a 期１（13 世紀中～後葉）



中世 2a 期（13 世紀末～ 14 世紀前葉）

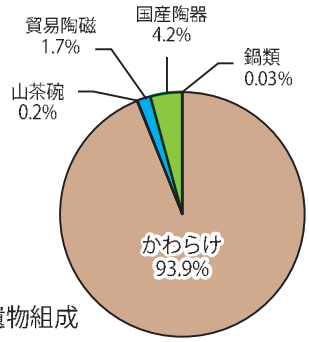


図４　北条氏邸跡の出土遺物組成

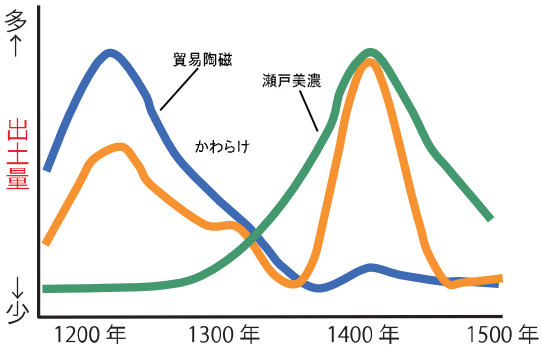


図５　北条氏邸跡の遺物出土量の推移

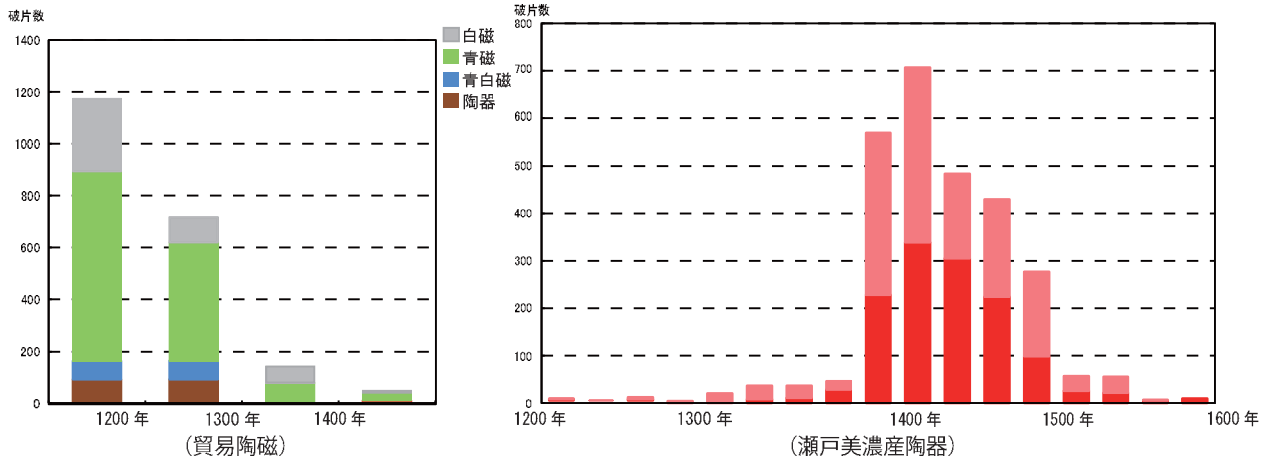


図６　北条氏邸跡の出土陶磁器量の推移

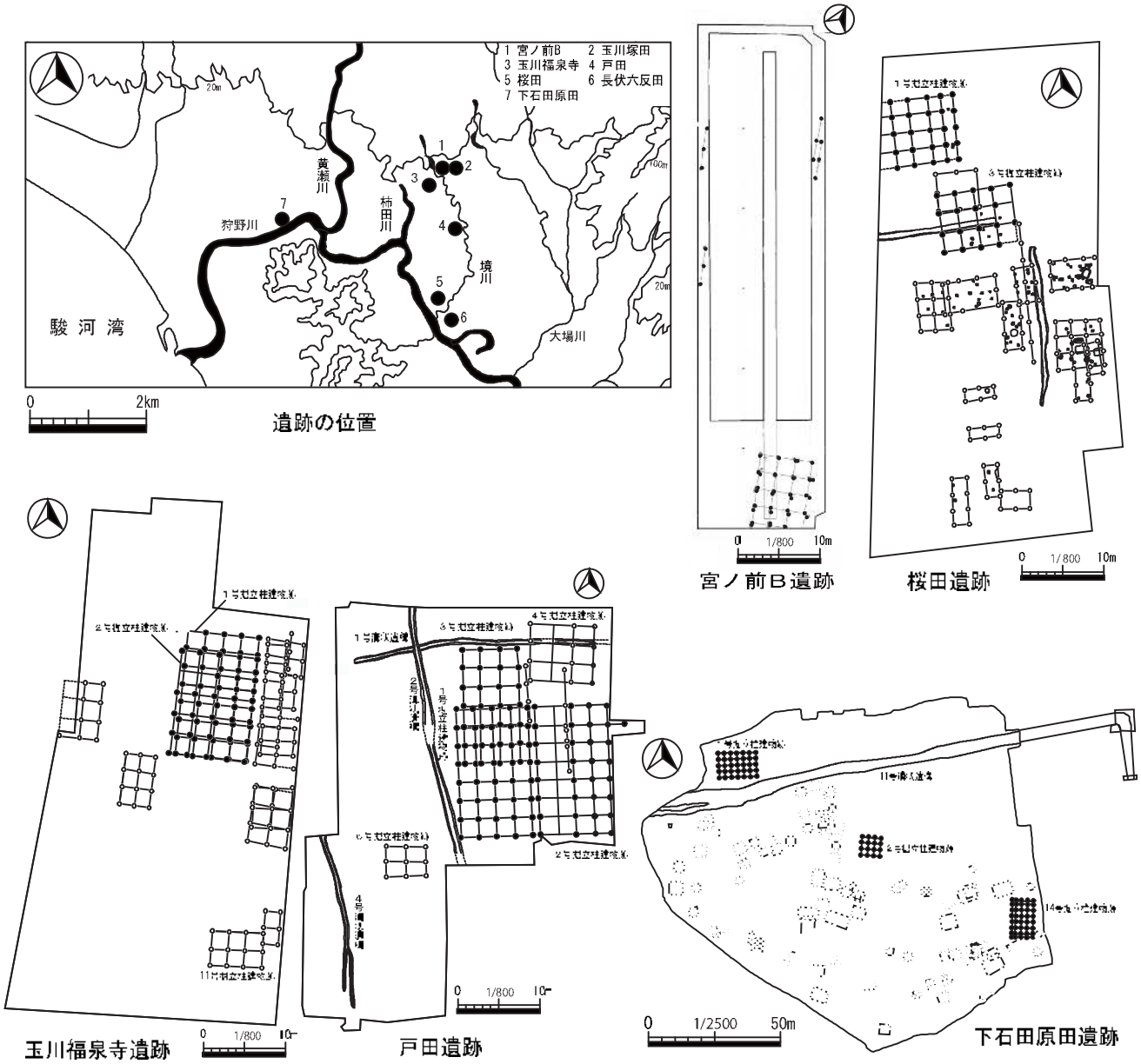


図７　伊豆国・駿河国の大型掘立柱建物跡

図８　伊東氏に関わる史跡と館推定地
（『伊東の歴史』より一部加筆）

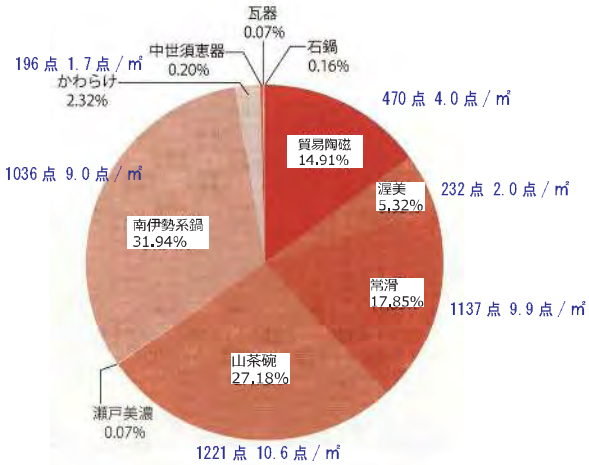
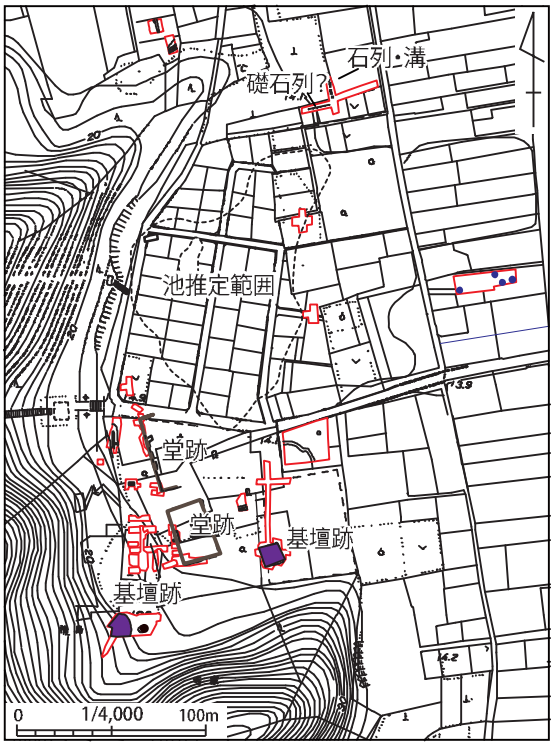


図９　井戸川遺跡 12~１３世紀の出土遺物組成
（『伊東の歴史』より一部加筆）

写真２　東から見た現在の願成就院



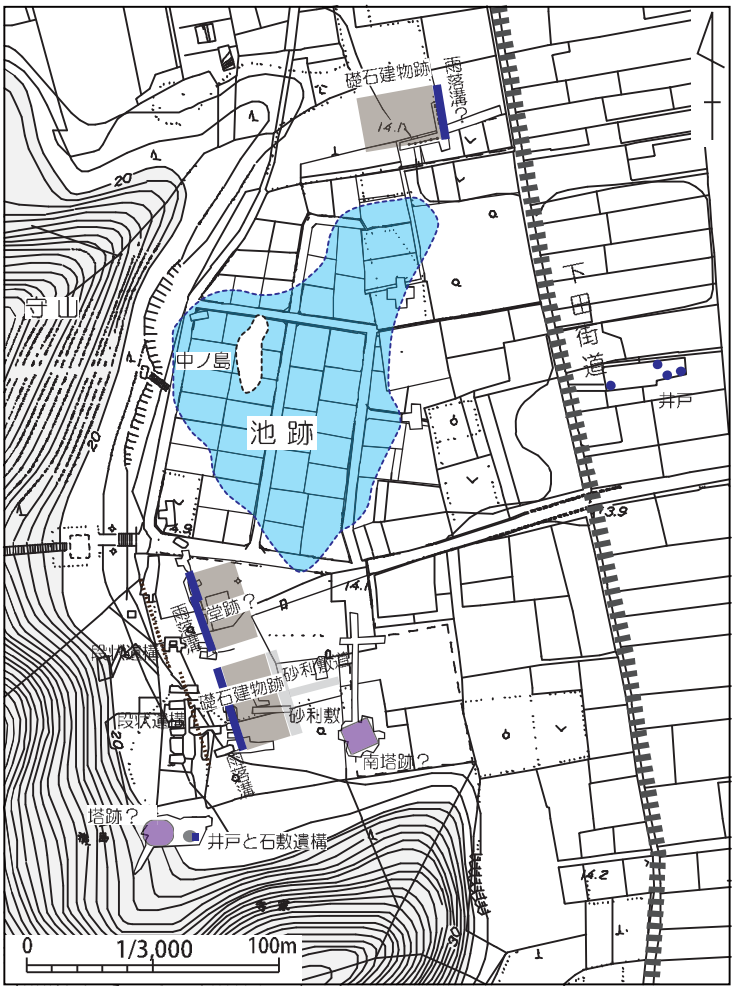


図 10　願成就院跡の遺構と伽藍想定図

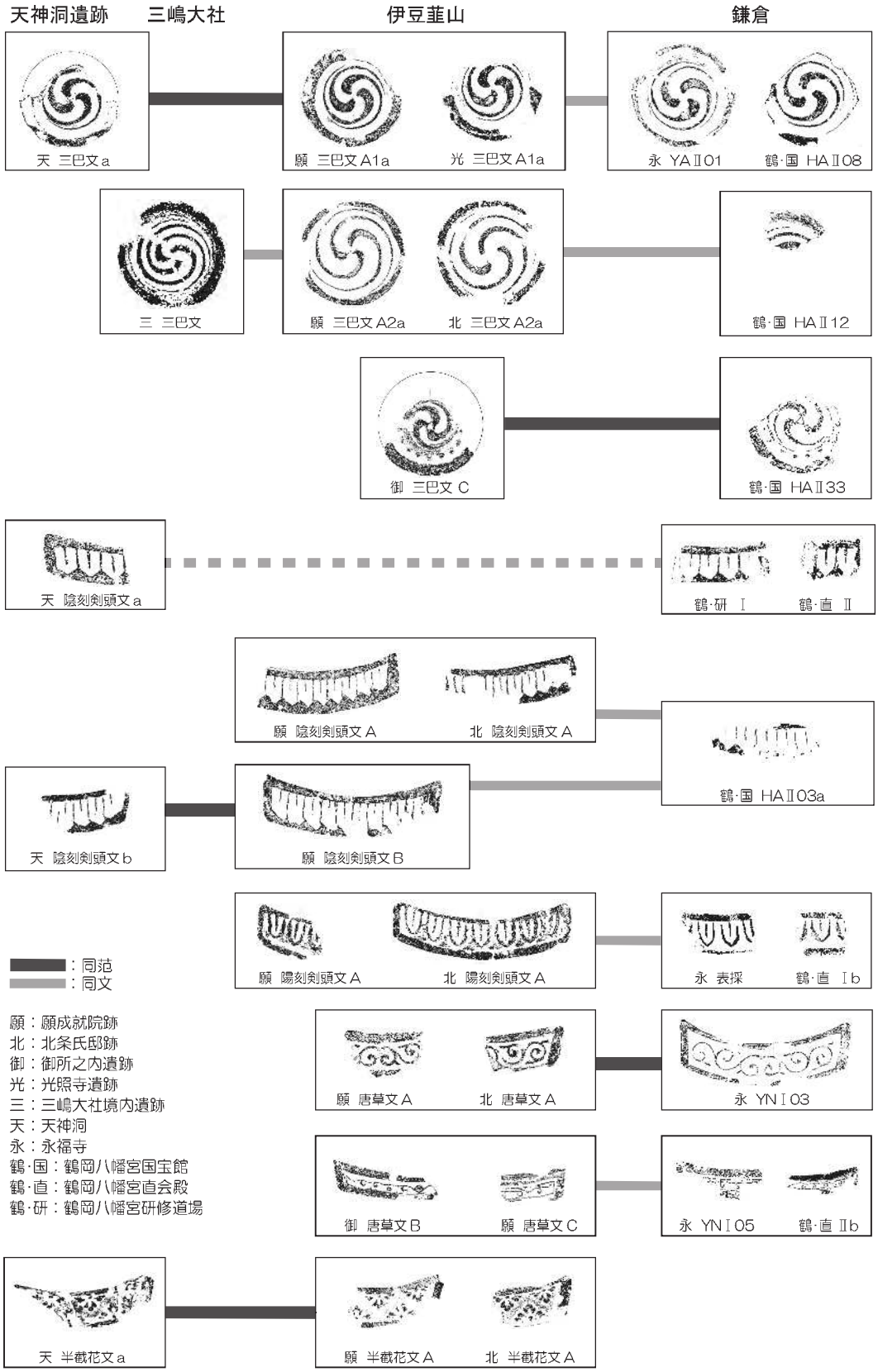


図 11　願成就院跡瓦と同范・同文瓦

房総の古墳文化と相模

千葉大学教授　山田　俊輔

はじめに

房総の自然環境は多様である。千葉県北部の下総は平坦な台地に小支谷が複雑に入り組む地形が主体である。千葉県中部の上総は、西部では養老川、小櫃川、小糸川によって開析された沖積地が広がり、東部では平坦な台地と九十九里平野が広がる。千葉県南部の安房は丘陵地が主体で、その中に小平野が点在する。また、各地域の交通環境にも違いがあり、自然環境と交通環境の差異によって各地域の文化が形成されたと考えられる。相模も酒匂川から境川までの河川沖積地を中心とする地域と鎌倉から三浦半島では自然環境が大きく異なっている。そこで、房総を「下総」、「上総西部」、「上総東部」、「安房」、相模を酒匂川から境川までの地域を国造名によって「師長・相武」、鎌倉から三浦半島を「鎌倉」と便宜的に区分し、房総と相模の様相について見ていくことにしたい。房総と相模の古墳時代を概観すると、古墳時代前期～古墳時代中期初頭、古墳時代中期中葉、古墳時代中期後葉～古墳時代後期前葉、古墳時代後期後葉の４つの局面を見出すことができる。

１．古墳時代前期～古墳時代中期初頭

西からの文物の流入が盛んに認められる時期である。古墳出現期においては、「師長・相武」では平塚市南原 B 遺跡で精美な畿内系二重口縁壺が出土し、大源太遺跡で手焙形土器、畿内系甕などが出土している。「上総西部」では木更津市高部古墳群、市原市神門古墳群で後漢鏡や手焙形土器など同系統の遺物が出土している。平塚市真土大塚山古墳では三角縁神獣鏡や銅鏃、水晶製勾玉などが出土し、畿内の前期古墳と同様の副葬品の組み合わせを確認できる。「上総西部」でも、木更津市手古塚古墳、市原市菊間新皇塚古墳、大厩浅間様古墳で三角縁神獣鏡や内行花文鏡、石釧、大型管玉など畿内の前期古墳と同様の副葬品を確認できる。

古墳時代前期のネットワークを知るうえでは柳沼賢治の研究が参考になる（柳沼 2013)。柳沼は駿河地域の土器である大廓式土器の分布を調べ、駿河 - 「師長・相武」 - 「鎌倉」 - 「上総西部」 - 荒川流域 - 北武蔵 - 上毛野というルートの存在を明らかにした（図１右下)。上述した相模と房総の諸古墳もこれらのルート上に分布し、このルートに沿って古墳文化が広がったと考えられる。

２．古墳時代中期中葉

「上総西部」では、養老川流域に姉崎二子塚古墳（116m)、小櫃川流域に高柳銚子塚古墳（130m)、祇園大塚山古墳（100m)、小糸川流域に内裏塚古墳（144m)、岩瀬川流域に弁天山古墳（86m）の大型前方後円墳が築造される（図２)。これらの諸古墳は墳丘が巨大であるだけでなく、埴輪を樹立し、また、高柳銚子塚古墳のように長持形石棺を埋葬施設とするものもある。さらに、鏡や金銅製武具など畿内の王権､豪族から賜与されたと考えられる文物に加えて朝鮮半島系の文物も副葬しており、

対外的な活動に関わった首長たちであった可能性が考えられる。

相模では目立った古墳の築造は認められない。古墳時代中期前半に富士山が噴火し、富士山の南麓・東麓では溶岩流が流れ、富士山南麓から相模川周辺までスコリアが降下したことが確認されている（藤村 2019）。富士山の噴火災害によって相模での古墳築造が衰退した可能性がある。

３．古墳時代中期後葉～古墳時代後期前葉

「上総西部」の５大古墳に後続する大型古墳は築造されず、村田川流域に円墳の菊間天神山古墳（40m）、小糸川流域に帆立貝形前方後円墳の上野塚古墳（45m）が築造されるのみとなる。古墳時代中期後葉の関東地方では、上毛野に井出二子山古墳（108m）、保渡田八幡塚古墳（96m）、北武蔵に埼玉稲荷山古墳（120m）、下毛野に摩利支天塚古墳（117m）などの大型前方後円墳が築造されており、北関東地域の隆盛が目立つ。この動態変化は、交通手段に馬が導入され、東日本の主要交通路が東海道ルートから東山道ルートへ変更されたことと関係づけて理解することができる。

鎌倉の采女塚古墳では上毛野西部の系統の埴輪が、横須賀市の蓼原古墳や八幡神社古墳群では上毛野東部の系統の埴輪が並べられており、上毛野と「鎌倉」の関係が確認できるようになる。また、厚木市登山１号墳では北武蔵系の埴輪が並べられている。「上総西部」でも、市原市菊間天神山古墳（円・40m）、木更津市酒盛塚古墳で北関東系の埴輪を確認できる。

４．古墳時代後期後葉

「上総西部」に再び大型古墳の築造が認められるようになる。養老川流域では山倉１号墳（46.3m）、姉崎山王山古墳（69m）、小櫃川流域では金鈴塚古墳（95m）、小糸川流域では内裏塚古墳群を構成する三条塚古墳（122m）、稲荷山古墳（106m）、九条塚古墳（105m）、古塚古墳（89m）が築造される。この時期に再興する「上総西部」の古墳には他地域の要素が認められる。内裏塚古墳群の埴輪は上毛野地域の系統の埴輪と考えられ、同系統の埴輪は姉崎山王山古墳でも認められる。山倉１号墳では埼玉県鴻巣市の生出塚埴輪窯産の埴輪が供給されている。金鈴塚古墳の組合式石棺の素材は秩父地域産出の緑泥片岩である。三条塚古墳の無袖式石室については小林孝秀が東海地域や「師長・相武」との関係を想定している（小林 2014）。

古墳時代後期後葉には「上総東部」でも大型古墳が数多く築造されている。殿塚古墳（88m）や姫塚古墳（58.5m）には大型で全身を表現し、顎鬚が特徴的な人物埴輪（山武 B タイプ）が樹立された。「上総東部」では東北系土師器が集中し（栗田・木島 2005）、福島県いわき市牛転１号墳の人物埴輪に山武 B タイプの特徴を有するものがあることが指摘されており（日高 2019）、南東北地域との関わりのなかで「上総東部」の大型古墳が築造されたと考えられる。

古墳時代後期後葉の上総における大型古墳の築造は、「上総西部」は上毛野・北武蔵・「師長・相武」などの地域、「上総東部」は南東北地域との交流によって築造しえたと考えられる。

５．安房と三浦半島

安房は古墳の築造は少なく、海食洞穴が墓として盛んに利用された。三浦半島でも南部を中心に古墳時代の海食洞穴が多数ある。三浦市海外１号洞穴から出土している鹿角製釣針は和歌山県の日向浦遺跡や西庄遺跡から出土しているものと酷似し、弓の握り部分に使用された鹿角製弭も和歌山県から三浦半島、房総、東北南部までに分布が広がる。海食洞穴やト骨も同様の分布傾向であり、海上を広域に往来した人々の存在を示唆する。

海食洞穴においても刀剣、鉄鏃、短甲、須恵器など古墳と同様の器物が副葬されており、彼らと古墳文化の接点もあったことがわかる。大寺山洞穴からは鹿角で製作した刀剣装具が出土している。数は少ないが各地の古墳から出土し、非常に精巧なつくりで斉一性が高いことから、近畿の王権か豪族の下で生産され、配布されたと考えられる（山田 2016）。

おわりに

古墳時代の相模と房総には、【駿河 - 「師長・相武」 - 「鎌倉」 - 「上総西部」 - 荒川流域 - 北武蔵 - 上毛野のルート】と【紀伊半島 - 伊豆半島 - 三浦半島 - 房総半島南端 - 東北南部を繋ぐ海のルート】の二つのルートを確認できた。【駿河 - 「師長・相武」 - 「鎌倉」 - 「上総西部」 - 荒川流域 - 北武蔵 - 上毛野のルート】は、古墳時代を通じてメインルートの役割を果たし、「師長・相武」 - 「鎌倉」 - 「上総西部」は類似した古墳文化が展開することとなった。もう一つのルートである【紀伊半島 - 伊豆半島 - 三浦半島 - 房総半島南端 - 東北南部を繋ぐ海のルート】は海民の往来ルートであった。二つのルートを共有した房総と相模は、様々な位相の繋がりを有する「となりにくに」の関係にあったといえる。

【引用文献】

栗田則久・木島桂子 2005「古代の上総北東部 - 古墳時代後期からの集落と古墳の動向 - 」『研究紀要』24、財団法人千葉県文化財センター

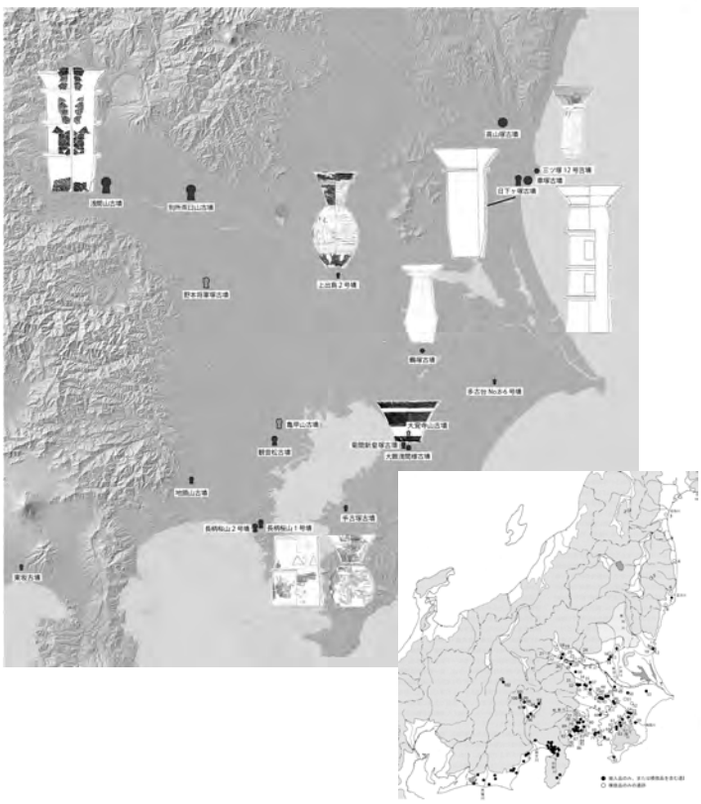
小林孝秀 2014『横穴式石室と東国社会の原像』、雄山閣

日高　慎 2019「太平洋沿岸域地域における関東と東北との交流」『古墳分布北縁地域における地域間交流解明のための実証的研究』、福島大学行政学類

藤村　翔 2019「富士山古墳時代・平安時代噴火災害」『季刊考古学』146、雄山閣

柳沼賢治 2013「大廓式土器の広がり - 駿河以東について - 」『駿河における前期古墳の再検討』、静岡県考古学会

山田俊輔 2016「鹿角製刀剣装具の系列」『日本考古学』42、日本考古学協会



大廓式土器の分布
（柳沼賢治 2013 より）

図１　古墳時代前期後葉～中期初頭
における主要古墳の分布

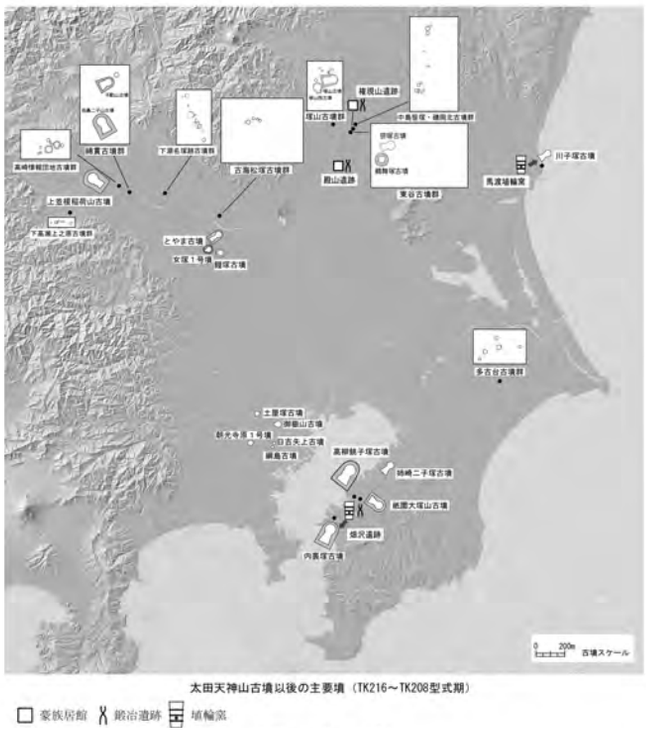


図２　古墳時代中期中葉（TK216-TK208）
における主要古墳の分布

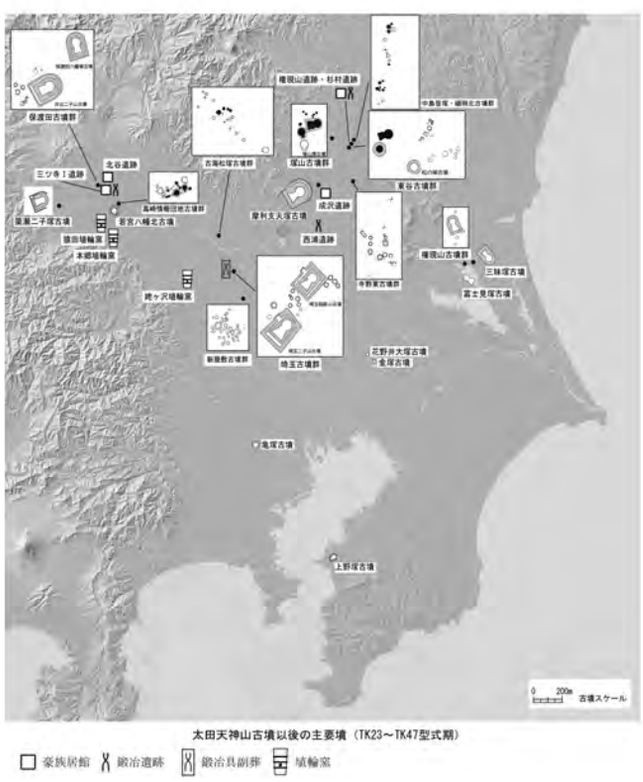


図３　古墳時代中期後葉（TK23-TK47）
における主要古墳の分布

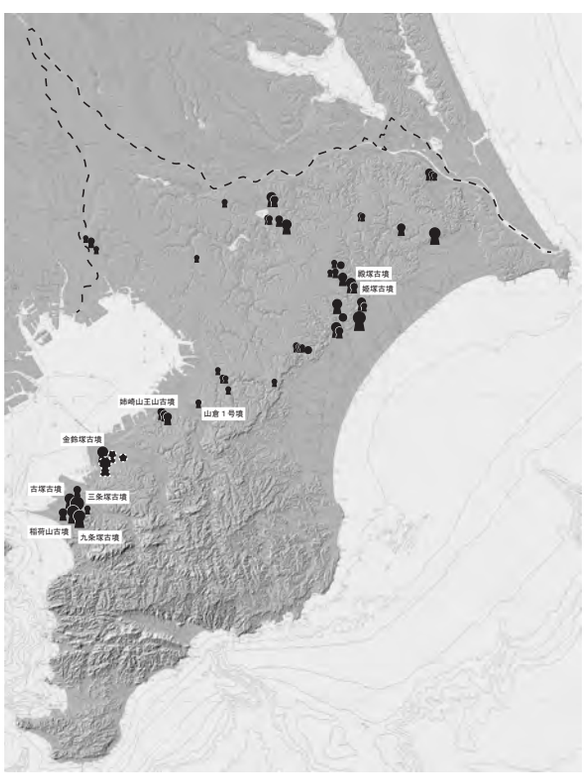


図４　古墳時代後期後葉（TK43-TK209）の
房総半島における主要古墳の分布

※　地形図は DAN 杉本氏のカシミール３Ｄを使用。

令和２年度　考古学ゼミナール
となりの“くに”と相模
発行日　令和２(2020)年 10月17日
編集・発行
神奈川県教育委員会　生涯学習部　文化遺産課
中村町駐在事務所（神奈川県埋蔵文化財センター）
〒232-0033　横浜市南区中村町 3-191-1
電話：045-252-8661（平日９～17時）
FAX：045-252-8663